

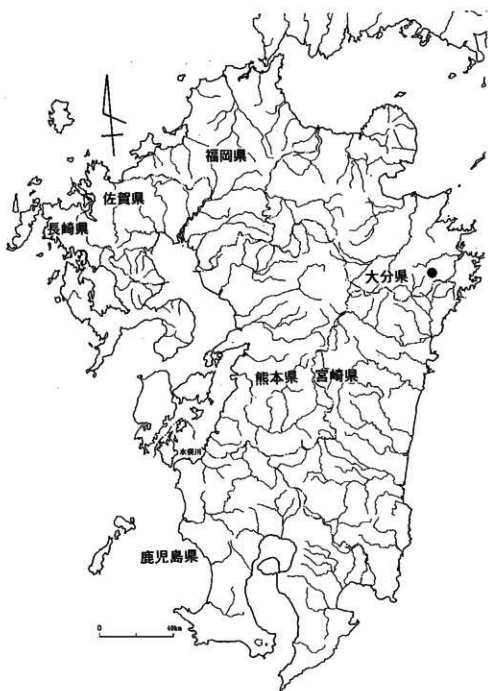
県道上爪清見園線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

又 江 遺 跡

2003

大分県教育委員会

又江遺跡



2003

大分県教育委員会

序 文

本書は、県教育委員会が大分県佐伯土木事務所の依頼を受けて実施した県道上爪清見園線道路改良事業に伴う又江遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する直川村は、大分県南部の内陸部に位置し、その北側を臼杵一八代地質構造線が走っています。このため、村内は深い開拓谷が広がり、古来から河川沿いの人々の交通路として利用されてきました。

今回調査した又江遺跡は、そうした交通路の一つで、佐伯方面と南海部郡宇目町を結ぶ中間点にあたり、かつては豊後国と日向国を結ぶ重要路線の一部でした。発掘調査の結果、近世から近代にかけての石切場の跡と土塁状の遺構が発見されましたが、この場所は見晴らしのよい高台にあり、この地域が西南戦争における古戦場であったことから、それに関係する遺構であることも推定されています。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先入を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成15年3月31日

大分県教育委員会

教育長 石川 公一

例 言

- 1 この報告書は、平成13年度に大分県教育委員会が大分県土木建築部佐伯土木事務所から委託を受けて実施した、県道上爪清見園線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に掲載した遺構図作成及び写真撮影は高橋信武・五十川雄也が行った。
- 3 図面整理は文化課文化財資料室において行った。
- 4 本書に使用した方位はすべて真北である。
- 5 写真・図面等は、すべて文化課文化財資料室において保管している。
- 6 本書の執筆・編集は高橋信武が担当した。

本 文 目 次

第1章 はじめに	
1. 調査の経過	1
2. 調査の組織	1
第2章 位置と環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	3
第3章 調査の内容	
第4章 おわりに	9

第1章 はじめに

1 調査の経過

又江遺跡は、大分県南海部郡直川村大字横川字又江に所在する。

調査は、県道上爪清見園線道路改良工事に伴い実施した。この道路は直接的には直川村と字目町とを結んでいるが、現道は山間部を屈曲しながら続く細い道である。この路線が完成すれば、現在、大分市と宮崎市とを結ぶ最短路線である国道326号線と大分県東部の海岸部とを結ぶ重要な道路になると期待されている。今回調査した地区は平成14年度事業実施予定地区として、平成12年度初めに県土木建築部企画検査室を通じ県佐伯土木事務所から事前の分布調査依頼があった。これを受けた県教育委員会文化課は、平成12年度当初に分布調査依頼のあった地区すべてで分布調査を実施した。その結果、当地区において土塁状のものを確認し、分布範囲が狭いため短期間の発掘調査を実施することとした。本調査は平成13年2月13日から3月1日の間に実施した。

2 調査の組織

調査組織 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

調査総括 大分県教育委員会教育長

大分県教育庁文化課課長

同 参事兼課長補佐

同

調査員 同 発掘調査一般事業担当主幹

同 嘱託

石川 公一

工藤 正徳

麻生 祐治

清水 宗昭

高橋 信武

五十川雄也

第2章 位置と環境

1 地理的環境

遺跡の位置する直川村は、大分県の南部にあり南部地域は宮崎県と接する。町内は県南を代表し佐伯湾に注ぐ番匠川の上流域にあたり、遺跡付近では支流の久留須川が南西から北東に流れる。直川村はまとまった平野部は少なく、河川沿いにある段丘面が山裾に分布する状態である。一方、町の西側に位置する字目町は宮崎県延岡市で日向灘に注ぐ北川の上流域に含まれ、横川西部に番匠川と北川の分水嶺が存在する。番匠川流域から宮崎県に至る路線は古来二つあった。ひとつは直川村赤木から支流の久留須川沿いに南下し、県境の尾根線にある陸地峠を越

位置

古来の
交通路

えて宮崎県東臼杵郡北浦町に出るものである。二つめは赤木以西の支流名、横川川沿いに南西に進んで字目町境の見明峠を經由し、塩見園、重岡を通って県境尾根にある梓峠あるいは谷沼いに東臼杵郡北川町に入るというもので、県道上爪清見園線には該当する。

又江遺跡は二つめの路線上に位置するだけでなく、又江で北側に枝分かれしている支流をさかのぼれば、直川村の北にある本匠村へも行くことができる。遺跡からは両方の路線を見下ろすことができる。



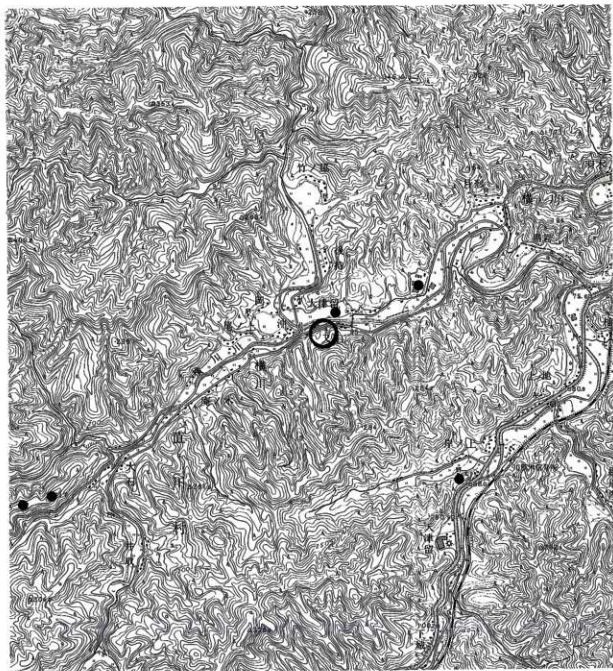
第1図 遺跡位置図(国土地理院1/20万「N1-52-5」)

2 歴史的環境

直川村では考古学的調査例が少ないが、調査地域周辺に限っても第2図のように縄文時代以後の遺跡が存在する。亀の甲遺跡(3)はこの周辺では珍しい広い河岸段丘地形上にあり、縄文時代早期(約8,000年前)の押型紋土器群が多量に採集されている(「大分県史 先史編2」)。大津留遺跡(4)は一段低い段丘上に立地する弥生時代の遺物散布地である。横川流域には同様の地形が所々に見られ

縄文時代

弥生時代



- 1: 又江遺跡 2: 用米城址 3: 亀の甲遺跡 4: 大津留遺跡
5・6: 台場跡

第2図 又江遺跡位置図(国土地理院1/25,000「上直見」・「千束」)

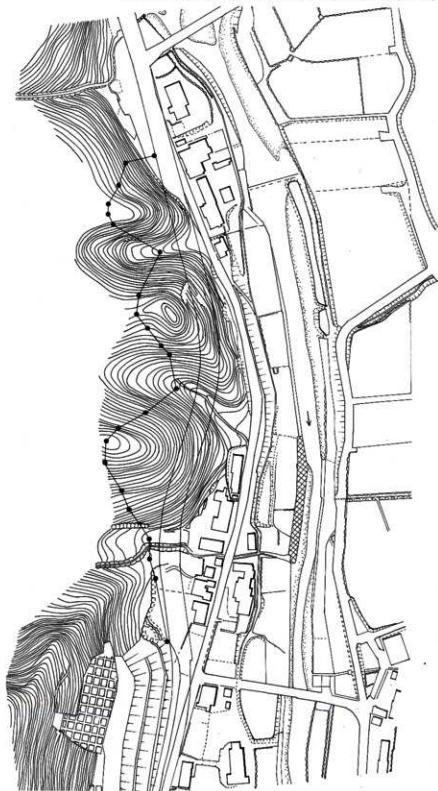
中世城館

るので、未発見遺跡もあると思われる。室町時代頃の中世では、又江の東南約1.3 kmの国道10号を望む段丘上に用名城址(2)が存在する。住民の避難所を兼ねた簡略化した城跡といわれている。宇目町境の見明峠周辺(5・6付近及び西方一帯)には西南戦争時の台場が十数個分布している。これらの存在は今のところ、文献上の記録としては残っていないようである。佐伯方面と宇目との主要な路線であり、警備のために設けられたのであろう。当時、横川村東部の月形・黒岩で

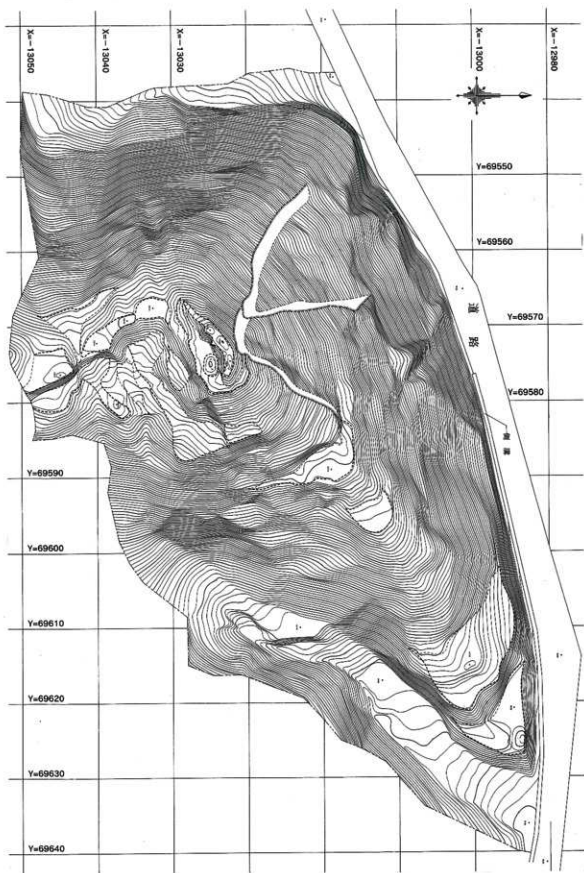
は戦闘が行われた後、政府軍が又江では反政府軍の兵士を捕らえた、と記録されている(直川村教育委員会 1971「直川村郷土史 第一集」)。

第3章 調査の内容

又江遺跡は周辺より26m程度高く見晴らしのよい小山の上に位置する。頂上部には、幅2mほどの高まった部分が長さ約12mにわたって存在する。平面形は東部で湾曲し、その部分の内側には幅約2mの平坦部がある。平坦部の東部には長さ2.4m、幅1.6m、深さは南側から測って0.4m、北側の土塁状部から測って1.5mほど窪んでいる。北側の土塁状部分の西端の場所から約12m南に向かって細い尾根がある。北側の平坦部の南と西側尾根の東側は所々凝灰岩が露出している調査は北側平坦部の発掘と土塁状



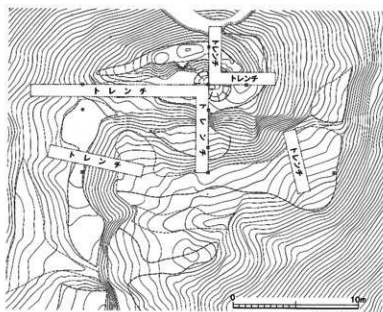
第3図 調査区位置図



第4図 調査区地形図 (方眼は10m)



第5図 調査前の地形測量図



第6図 トレンチ配置図

部の断ち割り西側尾根の断ち割り等を行った(第6図)。以下、その概要を述べる。

1・5トレンチ(第7・8図)

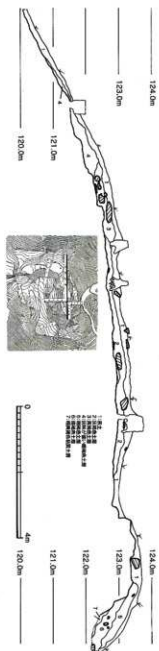
土層断面図は繋げて示した。1トレンチ部分(図の右側の盛り上がったところは5トレンチ、その左側が1トレンチ)は、厚さ10cm前後の表土の下に、細片から人頭大以上の凝灰岩を含んだ褐色気味の土層が堆積していた。この凝灰岩は角礫で、人為的に打ち欠いたものである。この中に1点、長さ87cm、幅45cm、厚さ約30cmの平板な長い石が横

たわっていたが(●印)、何らかの製品の未製品の可能性がある。この層の厚さは、平坦面で30cm前後、下層は地山と思われる粘土質土層で、左部分の斜面部に残る。斜面下方では次第に薄くなり消えている。その下は岩盤の凝灰岩である。5トレンチ断面図作成位置は土塁状部の末端の方で、岩盤の凝灰岩が盛り上がっており、外側に土層の堆積がみられる。

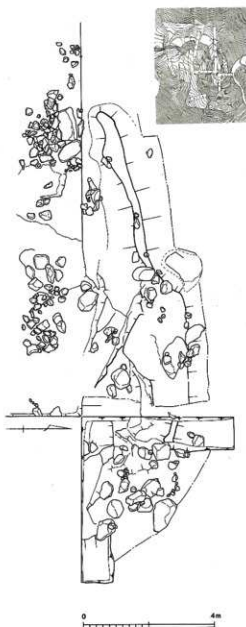
2・3トレンチ(第9図上)

土層断面図は2・3トレンチを接続して示した。図中央の平坦部の左側は凝灰岩の崖面で、石切の鬚痕がある。そこから下には薄い表土が堆積するだけである。図中央の平坦部は、左半分には黄褐色土層が20cm強あるが右半分には表土だけがある。土塁状部の断面にも岩盤の上に黄褐色土の堆積が認められる。なぜか2層の暗褐色土が幅狭く上に乗っている。岩盤をトレンチ外にも露出させたところ第8図のように半円形に巡る状態であった。

南北断面



第7図 1・5トレンチ層序図



第8図 1・5トレンチ周辺平面図

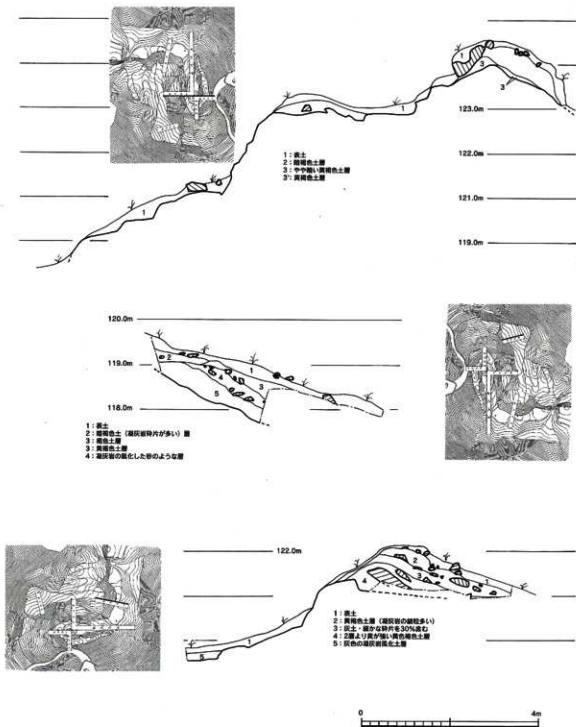
西側尾根

4トレンチ (第9図下)

岩盤の上に1.1mの高さで土層の堆積がみられる。各層には多量の凝灰岩を含んでいる。東部(図の左部)は岩盤の上にわずかに土層が堆積しているだけである。

6トレンチ (第9図中)

地表下約1mで岩盤面に達する。最下層は4トレンチ東部や5トレンチ最下層と同じく凝灰岩の風化した砂のような層である。



第9図 2・4・6トレンチ層序図

第4章 おわりに

調査で判明したことをまとめておきたい。

山頂部を中心に6個のトレンチを設定し、北部の土塁状部分、西部の細尾根状部分、東部の低地部の状態を調べた。その結果、土塁状部分の南側に伸びた平坦部で人為的に打ち欠いた凝灰岩の角礫の堆積を確認した。また、その南側にある崖部分で石切の跡、鑿の跡を確認した。したがって、頂上部南部が窪んでいるのは石切場として利用されたためである。ただ、全ての調査区で石以外の遺物は出土せず、この面からは石切場であった時期の推定はできない。調査に参加した地元民や周辺の住民に聞いてみたが、誰もここに石切場があったことを知らなかった。調査地の東側斜面には、最近撤去されていたが、凝灰岩を用いた墓地在存在した。所有者の村上純也氏の御教示によればそれらの年号は、宝暦8(1758)年・安永7(1778)年・天明5(1785)年・寛政4(1792)年・文化9(1819)年・嘉永元(1848)年等である。今回調査して確認した中には立面観が長方形で断面が方形の上記墓石に似た墓石はなかったが、おそらくこの石切場が利用されたのであろう。1トレンチにはすでに記したように1点、平板な長い石が横たわっていたが、何らかの製品の未製品の可能性がある。両端部は丸く、片面が平面ではなく盛り上がっていた。石垣の部材とは考えられず、石塔に加工する途中のものを何らかの理由で放置したのであろう。もしこれが墓石であるなら、板碑(鎌倉時代)→板碑が簡略化し、梵字・蓮の花はあるが死者名はない墓石(室町時代末から江戸初頭)→頭部が尖り、相変わらず背面のみは未加工で平坦でないもの(江戸初期)→頭部は尖り背面も平坦なもの(江戸中期)→長方形墓石(江戸後期)という墓石変遷観上の室町末から江戸初期の形態を示している。調査地区の頂上から見下ろす眼下には、川向こうに浄土真宗大谷派の善正寺がある。住職によれば寺の創始は天正4年(1576)年とのことである。寺の創始に前後する頃からこの石切場の歴史が始まったのではなかろうか。年代の明白な陶磁器等は出土していないので、以上は推定である。北部の土塁状部分は内側東部に窪みがある。この地域で見晴らしのよい高台にこのような状態のものがあれば、西南戦争との関係を疑ってみる必要がある。戦史上は又江で戦闘は行われていないが、又江は県境地帯に反政府軍が立て籠もっていた当時、宮崎県から宇目町を経て佐伯方面に通じる重要な路線上に位置していたので、川沿いの下流1.3kmにある月形集落には政府軍が駐屯していた。彼らは又江では反政府軍兵士二名を捕らえ、斬殺したと伝えられている^(註1)。又江にも政府軍の警戒網が布かれていたのであろう。念のために調査区周辺や調査区対岸の小高い場所を踏査してみたが、台場らしきものは確認できなかった。防衛庁や東京大学その他には活字化されていない当時の史料が多数あるので、今後新たな事実が出てくることも考えられる。

トレンチ

石切場跡

近世墓地

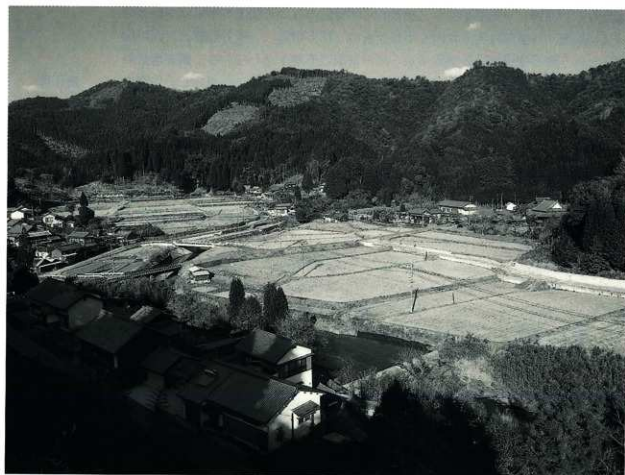
未製品

善正寺

註1 柳井雅雄1971「西南の役郷土戦史直川村陸地時の争奪」直川村郷土史
第一集直川村教育委員会・直川村史談会



北西から見た調査区



調査区頂上から北西を見る

1トレンチ近景

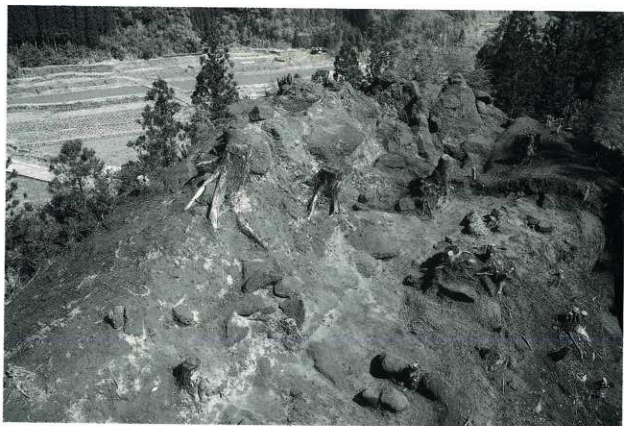


調査区より北西を見る





調査前の頂上部



表上剥ぎ後の頂上部

報告書抄録

ふりがな	またえいせき
書名	又江遺跡
副書名	県道上爪清見園線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高橋信武
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1 TEL097-534-1111

ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
またえいせき 又江遺跡	おおいだけんみなみあまき 大分県南海 べくぐんなおかわむら 部郡直川村 またえ 又江	44435		32°52'50"	131°52'50"	2001.02.13 ～ 2001.03.01	10,000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
又江遺跡	石切場 台場?	近世 近代	石切場遺構 土塁状遺構		

又江遺跡

県道上爪清見園線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15(2003)年3月31日

発行 大分県教育委員会

印刷 豊栄産業㈱